



## 癌になって背骨が折れて

勝谷 章

救急車で運び込まれて整形外科の先生から最初に聞いた言葉が「血液の細胞の形がおかしい」だった。それを聞いた時には、フリーフォールに乗って地の底に向かいいつまでも落ちていく、そんな気持ちになった。結局ぎっくり腰と思って放ったらかきにしていたのが、実は背骨の破裂骨折で、しかも「多発性骨髄腫」という癌のおまけつきだった。ガン保険に入っておけば、正規の社員だったら、と悔やむことはばかり。内科の担当医に聞いた。「すぐ死にますか?」「5年はもつねえ」という返事。瞼を閉じたらこんな光景が見えた。他人が浜辺に立って海を眺めても、水平線の彼方は見る事も想像する事もできない。これが寿命なら、自分は湾の端と端を結ぶ線その辺りが余命なのだ。そう思えた。

今はコルセットをして病院内を歩き回り、窓と三方カーテンに仕切られた世界が全て。時折訪ねてくれる友人や家族。しょっちゅう訪ねてくるのは注射器を持った看護師だ。それにつけても土、日はサービスが悪い。街に出ても土、日にサービスランチをやっているレストランも少ないから、まあ、あたり前か。ナースセンターに人がいない時は、ナースコールを押してもやっ来て来ない。他の患者にかかりきりなのだ。『おたんこナース、声も出ないくらい痛い時には大声で呼んで下さい、と云う』ってな句が浮かぶ。しかし奴らは油断できない。突然呼びかけながらカーテンを開けるから。思わず「忙しいのにすみません。」と殊勝な事を言ってしまう。看護師との応答は楽しい。「お薬のカラ捨てないで、と言いませんでした?」「すみません。人生を捨てたもんで、つい。」「歯みがき中ですか?」「ええ。まだ男は磨けていませんけど。」一瞬の掛け合いだ。緊張する。担当の看護師が心安くたのみ事を引き受けてくれたり、親身になって状態を聞いてくれるのも頼りがいを含めてすごく嬉しい。患者は体の悩みを(まあどうでもいい事だったり、どうにもならない事が多いのだが)聞いて欲しいものだ。ただ、「看護師さん。俺この2週間で8kg体重が減ったんだけど、この調子で行くとあと14週でゼロになるけど、それって焼場に行って灰になったぐらいの重さかね?」なんて言うのにらまれる。血液の癌患者は再入院、再々入院と入って来ては

治療を受け、またシャバへと帰って行く人が多い。皆んなそれを受け入れているのだ。だから「入って来た時には白い車だったから、やっぱり出る時は瓦屋根のついた黒い車かね。」などと自虐ネタを笑いとばす諦観の持主たちだ。それは看護師には肯定できない。当然だろう。

上司が訪ねて来る。こちらは迷惑を掛けたと恐縮気味だ。「すみません。妻に言ってロッカーの中の私物をなるべく早く片付けさせますので」と云うと。「いつかは必ず帰ってくる。そう思いたいじゃない。だからそのままでもいいよ。」と言ってくれる。バイトは本来使い捨て、こんな風に言ってもらおうと思わずホロリとしてしまう。ただ感謝だ。

家族も久しぶりにベッドの回りに全員集まった。上の2人の娘は遠くに行っていて、同時に顔を合わせるのも何年ぶりだろう。頼もしくも見える。心配してくれる分だけこちらとも思い、した事もないメールを夜寝る前にするのが常になった。子供って、本当にただいてくれる、それだけで有難いし、生んでいて本当に良かったと思えた。

タベはまた死ぬ事を考えてしまった。死ぬ覚悟は出来ている。人にはそれぞれ寿命があって20歳で死ぬ人もいれば100歳まで生きる人もいる。自分が死んでも60歳で死ぬという事自体は客観的に見れば特別どうという事もない。ただ回復の見込みのないガン治療で体を切り刻まれる様な未来が待っているのかも知れない…そう思うと恐ろしいのだ。

病室の窓から外を眺めると割り箸ですくって、くるくる巻きつけたらおいしそうな綿菓子が出来そうな雲。そして青い空。上昇気流に乗ってはばたきもせず、2羽の鳥がお互い円を描きながら庇に遮られた青い空に消えて行く。取り返しのつかない過去を悔やみ、どうしようもない事、解決のない事で悩み、悲しむのは人間の常。何が悪かったのか、どうすればここから逃げられるのかと考えあぐねる事自体が悩みの本質だろう。覚悟しかそれを乗り越える事は出来そうにない。そう思うと、ふとあの2羽の鳥の様子を思い浮かべる。風に逆らわずそのまま受け入れて、それでいて自由な。

ストレッチャーの上では、深い穴に突き落とされた気分だった。しかしベッドの上で天井を見続ける毎日とはいうものの、今の自分はその2羽の鳥の様に軽くなれる気がする。